

# 一仏乗法の拒否と受容 ——『法華經』における kṣip- の意味——

片 山 由 美

0. 『法華經』(*Saddharmapūṇḍarikasūtra*, 以下 SP) 第 3 章「譬喩品」(*Aupamya*)「流通分」には動詞 kṣip- の派生形 kṣipeyu (3rd pl. opt. 111), kṣipi (3rd, pl. opt., 118), kṣipitva (gerund, 112–13, 121, 128–30), kṣipeta (past ptcpl., 135) が使用され、一仏乗法を kṣip- する者が受ける地獄の苦の有様が克明に描写されている。鳩摩羅什 (A.D. 344–413) は、当該の kṣip- に「謗」という訳語を与えている。この kṣip- に対する先行研究者の解釈は次のように三つに大別される。

- (1) 「[the fools] scorn [the law], [愚かな者たちは、教えを] あしざまに言う, [凡愚の者たちは、説かれた法を] 謗る, [愚かな者たちは、説かれた法を] 嘲笑する」(Kern [1965], 松濤 [1982], 中村 [1995], 植木 [2008])
- (2) 「[愚かな輩は、教えを] 捨てる」(岩本 [1962])<sup>1)</sup>
- (3) 「[無知なさまざまな欲望に絶えず心奪われているものたちは、説かれた教えが判らぬままに] 拒む」(久保 [2006])

『法華經』は、一仏乗法を kṣip- する者を世尊や世尊の言葉に「信」(śraddhā) を置き、一仏乗法に「随喜」(anumoda) する者と対立的に描く。本稿は、このことを指摘することによって、(3) の久保解釈が一仏乗法とそれに類するものを対象とする kṣip- の『法華經』中の用例すべてに当てはまることを明らかにする<sup>2)</sup>。

1. 『法華經』第 2 章「方便品」中にも kṣip- の派生形の用例が見られる。

SPII34cd 「多くの愚かな者達は慢心を起こしている。彼らは説かれた法を理解せず[教え]を kṣip- するであろう (kṣipe, 3rd pl. opt.)」(kṣip- に対する鳩摩羅什訳「不敬信」)

SPII117ab 「愚かな (bāla) 彼らは私の法を kṣip- しよう (kṣipi, 3rd pl. opt.). 説かれたこと(法)を kṣip- して (kṣipitva) 不幸の地(地獄)に赴くであろう」(「破[法]不信」)

SPII142cd 「[彼等は] 經典 (sūtra) を kṣip- して (kṣipitva) 来世において地獄に落ちるであろう」(「不信受破[法]」)

これらの事例において kṣip- の主体は愚か者 (bāla) である。愚か者達の法や經典を kṣip- して不幸の地つまり地獄に落ちる可能性が強調されている。「方便品」

第 114 偈は彼等のことを次のように語る。

SPII141「なぜかというならば、この五濁の時代において、衆生たちは劣等であり、欠点あるものであり愛欲ゆえに盲目となり愚かな考えの者 (bālabuddhi) であり、彼等に菩提を求める心 (bodhāya cittam) は全くないからである」

愚かな考えの者は菩提心のない者である。彼等は菩提心がないため一仏乘法を受け入れることができない。愚か者に対して「adhimukti をもつ菩薩」は一仏乘法の理解者となることができる。

SPII6-7「それ（果報）を示すことはできない。これを表現する言葉も存在しない。だれか〔ある衆生〕に向かってこの法を説き、そして説かれた法を理解する、そのような衆生は adhimukti をもつ菩薩たちを除いて、この世間にはひとりも存在しない」

「adhimukti をもつ菩薩」に対比されるのは「劣ったものに対する adhimukti を有する者」(hinādhimukti) である。

SPII121「私達もまた最高の境地をさとしたその時、〔仏の菩提を〕三種に分けて説き明かしている。なぜなら、劣ったものに対する adhimukti をもつ無知な人間たちは「あなた方は仏になるでしょう」と言っても〔この言葉に〕信 (śraddhā) を置くはずがないからである」

『法華経』第 4 章「信解品」では、「劣ったものに対する adhimukti をもつ者」は「勝れた、仏陀の菩提に対する」(udārāyaṃ buddhabodhau) adhimukti を有する者に対比される。

SPIV110.6-7「〔世尊は〕菩薩達の面前で私達のことを劣ったものを志向する者 (hinādhimuktikā) と仰せられたのであり、彼等を勝れた (udāra) 仏陀の菩提に向かうように励まされたのです (buddhabodhau samādāpitāh)」

ここでは声聞が「劣ったものを志向する者」と呼ばれている。「劣ったもの」とは「極めて劣った多くの教え」(bahūn dharmān pratyavarān) とも言われる。「劣ったもの」によって意図されているのは声聞乗である。これに対して、SPII 6-7 の「adhimukti をもつ菩薩」とは、劣った教えを志向する者に対する「勝れた仏陀の菩提の獲得に対する志向をもつ菩薩」に他ならない。愚か者たる劣った教えを志向する者は一仏乘法を kṣip- する。さらに SPII138bcd には、一仏乘法を聞きそれに随喜する者が描かれる。

SPII138bcd「この善く説かれた法を聞いて随喜し (anumodī), たった一言でも口ずさむならば、彼らはすべての仏に対して供養をなしたことになるのである」

SPII121 に述べられるように、劣った教えを志向する者は授記の言葉に信を置

(142)

## 一仏乘法の拒否と受容 (片 山)

かない。さらに SPIII138 は一仏乘法を聞きそれに随喜する者を想定している。「kṣip-する」とは不信に通じる随喜しない心的態度を意味する。したがって、「方便品」において kṣip- は一仏乘法を受け入れないこと、一仏乘法の「拒否」を意味すると理解し得よう<sup>3)</sup>。

2. 「譬喩品」中に見られる kṣipitva の主体、対象、kṣip- した後におこる状態を整理すると次のようになる。

SPIII112 「愚か者が巧みな方便、乗り物を kṣip- して厳しい果報を享受する」

SPIII113 「経典 (sūtra) を kṣip- して厳しい果報を享受する」

SPIII118 「仏になる導き (buddhanetṛi) を kṣip- した愚かな考えの者が何度も動物になる」

SPIII121 「経典を kṣip- して身体不完全になる」

SPIII128 「仏になる導きを kṣip- して八難処に生まれる」

SPIII129 「愚か者 (bāla) が菩提を kṣip- して寂靜を得ることがない」

SPIII130 「経典を kṣip- して悪果を得る」

SPIII135 「経典を kṣip- した者の〔遭遇する〕難点 (doṣa) を語りつくすことはできない」

以上の用例から明らかなように、kṣip- する主体はすべて愚か者であり、kṣip- する対象は経典、法、巧みな方便、菩提、乗り物、仏になる導きである。彼等はこれらの対象を kṣip- した後には厳しい果報を享受する。つまり、彼等は輪廻世界をさまよう。さらに彼等のことを SPIII122, 123 は「経典や仏菩提を信じない者」(aśraddhat) と言う。「譬喩品」においても、kṣip- する者と対比的に、一仏乘法に随喜する者 (SPIII106), 「経典を信ずる者」(SPIII107), 「世尊が説いたことばを信ずる者」(SPIII108), 「世尊を信ずる者」(SPIII110) が想定される。さらに SPIII110 では世尊を信ずる者が純粹に仏陀の菩提を志向する者 (adhimuktisāra) であることが語られる。これらのことは、「譬喩品」もまた一仏乘法を kṣip- する者を世尊や世尊の言葉に信を置き、一仏乘法に随喜する者に対立的に捉えていることを示している。「譬喩品」においても「一仏乘法を kṣip- する」とは一仏乘法を受け入れないこと、それを拒否することを意味する<sup>4)</sup>。

3. 『法華経』においては動詞前接辞 (upasarga) が先行する kṣip- の派生形も使用されている。地界、虚空界等を対象とする pra-kṣip-, 仔等を対象とする ni-kṣip-, 舌根、原子の塵等を対象とする upa-ni-kṣip-/sam-upa-ni-kṣip-, 法師の言葉や良家の息子の説法や法門を対象とする prati-kṣip- である。注目すべきは、prati-kṣip- である。用例は以下のとおりである。

1. SPVII183.9 「〔声聞乗の者であれ独覚乗の者であれ菩薩乗の者であれ〕良家の息子達の説法を prati-kṣip- せず, prati-bādh- せず」(「化城喩品」T.262.25b17: 受持不毀者)

2. SPX230.9「多くの人々がこの教説を prati-kṣip- する」(「法師品」T.262.31b21: 怨嫉)
3. SPX235.3「〔化作された比丘, 比丘尼, 信男, 信女たちは〕その説法者のことばを prati-bādh-, prati-kṣip- しない」(「法師品」T.262.31c28-32a03: 信受隨順不逆)
4. SPXIII287.11-13「如来が入滅したあとの正しい教えが滅ぶ最後の時世に, 正しい教えの prati-kṣip- がおこっている」(「安樂行品」prati-kṣip- に相当する語はない)<sup>5)</sup>
5. SPXVI338.2-3「優れた意向と〔菩提の獲得に対する〕志向をもつ (adhyāśayādhimukti) 良家の息子はこの法門を聞いて〔法門を〕prati-kṣip- せず, むしろ〔法門に〕隨喜 (abhyānumoda) する」(「分別功德品」T.262.45b23: 不毀訾)
6. SPXVIII375.1-8「このような法門を prati-kṣip- するものたちがどのようになるか知るべきだ. 〔彼等は〕このような經典を受持する比丘, 比丘尼, 信男, 信女たちを嘲るであろうし (ākrośiṣyanti, 悪口), 罵るであろうし (paribhāṣiṣyanti, 罵詈), 悪意のこもった冷酷な言葉をあびせるであろう. 彼等には言葉では言い表せないほどに望ましくない果報が生じよう」(「常不輕菩薩品」prati-kṣip- に相当する語はない)

1 と 3 においては, prati-kṣip- が「否定, 拒否」を意味する prati-bādh- とともに用いられている. 明らかに同義語反復による強調が意図されている. 5 において「隨喜」(abhyānumoda) の対概念として prati-kṣip- が使用されているのは注目に値する. 当然, 法に隨喜する者は菩提の獲得に対する志向を持つ者である. 以上より, 『法華經』中で kṣip- と prati-kṣip-, prati-bādh- はほぼ同義的に「拒否」を意味するものとして使用されていると言える.

4. 『三昧王經』にも kṣipitva/pratikṣipitva という表現が見られる.

1. SRSXVI22「〔愚かな比丘は〕法を kṣip- して, 菩提を得ることはない」
2. SRSXVI23「〔愚かな比丘は〕人中の最高者の乗り物を kṣip- して滅びてしまう」
3. SRSXXIV33「悪意をもった彼等は仏の教えを捨て, 法を prati-kṣip- した後は, アヴィーチ大地獄に住むことになるろう」
4. SRSXXXI28「多くの顛倒した考えの異教徒たちは, それを失い菩提を kṣip- して過酷で悲惨な運命に陥る」

kṣip- の対象は, 菩提, 乗り物, 法である. 3 においては法を prati-kṣip- して大地獄に住することが, 4 においては菩提を kṣip- して悲惨な運命に陥ることが述べられている. 『法華經』においては「法を kṣip- して不幸の地 (地獄) に赴く」ことが述べられていた. prati-kṣip- と kṣip- は同義語である. なお, SRSXXIV32 は仏陀の菩提を prati-kṣip- する理由を「非仏説」に求める.

『八千頌般若經』第7章「地獄章」では, 般若波羅蜜に対する prati-ākhyā- (否定, 拒絶), prati-kṣip-, prati-bādh- (否定), prati-kruś- (誹る), duṣ- (難ずる) という行為が想定され, それらの理由は同じく「非仏説」に求められている<sup>6)</sup>.

(144)

一仏乘法の拒否と受容 (片 山)

5. 『法華経』では一仏乘法を kṣip- する理由は世尊の「最初に説かれた言葉」(prathamabhāṣita) によって一仏乘法が説かれていないことに求められる。受容されてきた「仏説」に包摂されない新たな大乘思想を前に、それを直ちに受け入れることのできなかった時代環境を kṣip- は象徴している。一仏乘法を「誹る」ためには一仏乘法と受容されてきた仏説の相対化が必要である。kṣip- は一仏乘法を前にしたその受容と拒否の枠組みで意味をもつと考えなければならない。

- 
- 1) kṣip- のチベット語訳は「〔説かれた教えを〕捨て去る」([chos bstan] spang) である。松本 [2010: 37-39] は、kṣip- (投げ捨て) の対象として「経巻」を想定し、経巻を放擲するという解釈を提示する。2) 『法華経』の「見宝塔品」, 「常不輕菩薩品」, 「分別功德品」においてスメール山, 杖, 土塊, 天の衣, 花等を kṣip- するという用例が見られる。この場合、kṣip- は「投げる」という意味だと考えられる。これらの用例は考察対象外とする。3) Kern もまた SP II 142 における kṣip- を 'reject [the sūtra]' と解釈している。4) 「教え」(dharma) を kṣip- する用例が第 13 章「安樂行品」第 46 偈に見られる。SPXIII46「如来入滅後において、在家の者であれ出家した者であれ、求法者が教えを聞いて、それを kṣip- するようなことがあってはならない」kṣip- に同様の意味を想定し得る。5) 写本に基づいた戸田 [1979: 9] の KN の修正の指摘に従って訂正した。6) 藤田 [2005/2006] を参照。

#### 〈略号と参考文献〉

SP: H. Kern and B. Nanjo, eds. *Saddharmapuṇḍarikasūtra*. Bibliotheca Buddhica No.10, 1908-1912. SRS: P. L. Vaidya, ed. *Samādhirājasūtra*. Buddhist Sanskrit Texts No. 2. The Mithila Institute, 1961. T: 『大正新脩大藏経』. H. Kern [1965] *The Lotus of the True Law, Sacred Books of the East*. vol.21. Delhi: Motilal Banarsidass. 岩本裕・坂本幸男 [1962] 『法華経』(上) 岩波書店。植木雅俊 [2008] 『法華経』(上) 岩波書店。久保継成 [2006] 「法華経と人間—『法華経』拝読ノート—」『法華経と大乘經典の研究』山喜房佛書林。田村智淳 [2003, 2004] 「大乘仏典 10,11 三昧王経 I, II」中央公論新社。戸田宏文 [1979] 「梵文法華経考」『仏教学』7: 1-22。中村瑞隆 [1995] 『現代語訳 法華経』(上) 春秋社。松涛誠廉 [1975] 『大乘仏典 4 法華経 I』中央公論新社。松本史朗 [2010] 『法華経思想論』大蔵出版。

(平成 23 年度科学研究費補助金 (特別研究員奨励費) による研究成果の一部)

〈キーワード〉『法華経』, kṣip-, prati-kṣip-

(広島大学大学院, 日本学術振興会特別研究員)